

第一日曜日  
教会学校 9:00～  
主日第一礼拝 9:00～  
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日  
教会学校 9:00～  
聖書を読む会 9:00～  
主日礼拝 10:30～

# 日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2018 (平成30年) 1. 14

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276  
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

聖書と祈り会  
毎週水曜日 10:30～  
成人会  
第3日曜日 礼拝後  
婦人会  
第4日曜日 礼拝後  
教会附属 南部坂幼稚園

## 「パウロの切なる願い」

(テサロニケの信徒への手紙一 [五])

牧師 松谷 祐二

### テサロニケの信徒への手紙一

第二章一七節～第三章五節

兄弟たち、わたしたちは、あなたがたからしばらく引き離されていたので、——顔を見ないというだけで、心が離れていたわけではないのですが——なおさら、あなたがたの顔を見たいと切に望みました。だから、そちらへ行こうと思いましたが、殊に、わたしパウロは一度ならず行こうとしたのですが、サタンによって妨げられました。わたしたちの主イエスが来られるとき、その御前でいたいあなたがた以外のだれが、わたしたちの希望、喜び、そして誇るべき冠でしょうか。実に、あなたがたこそ、わたしたちの誉れであり、喜びなのです。

そこで、もはや我慢できず、わたしたちだけがアテネに残ることにし、わたしたちの兄弟で、キリストの福音のために働く神の協力者テモテをそちらに派遣しました。それは、あなたがたを励まして、信仰を強め、このような苦難に遭っているも、だれ一人動揺することのないようにするためでした。わたしたちが苦難を受けるように定められていることは、あなたがた自身がよく知っています。あなたがたのもとにいたとき、わたしたちがやがて苦難に遭うことを、何度も予告しましたが、あなたがたも知っているように、事実そのとおりになりました。そこで、私も、もはやじっとしていられなくなつて、誘惑する者があなたがたを惑わし、わたしたちの労苦が無駄になつてしまふのではないかとという心配から、あなたがたの信仰の様子を知るために、テモテを派遣したのです。

(新共同訳聖書)

パウロの熱い思いの伝わってくる文章です。彼は、テサロニケ教会の信徒たち（兄弟たち）の

顔を見たいと、切望していました。自分自身で言うとう度も思つたにも関わらず、どういふ事情でか、それを妨げられていました。我慢ができませんでした。じつとしていられませんでした。しかし行けないものですから、福音伝道の同労者テモテに、代理として兄弟たちの信仰の様子を見て来てもらうということ、パウロは今回は我慢したので。

兄弟たちのことがそれほど心配だつたからです。兄弟たちの何が心配なのか。彼らが苦難に遭つて動揺すること、つまり、キリスト教に入信して早々に、様々な迫害や差別を受けることになり、嫌気がさし、意気阻喪して、信仰を捨ててしまふ、ということがです。

テサロニケ教会の信徒たちが、パウロの伝道した福音を初めて聞き、イエス・キリストを信じて洗礼を受けた時から、それほど多くの月日は流れていません。そして、彼らの入信の直後から、ユダヤ教側からの迫害は始まっています。パウロ自身が一番狙われ、捕まれば殺されかねない身の上でしたから、テサロニケから逃れ、さらに他の町に移つて伝道していきました。しかし、テサロニケに残して来た兄弟たちのことを、忘れる日はなかつたのです。母がやむをえずわが子と離ればなれになり、それでも何とかして、わが子にひと目会いに行きたい、と切望するのにも似た思いでしょう。

しかし、読みまちがえてはならないのは、パウロは、テサロニケの兄弟たちが差別を受けたり、ひどい目に遭わされたりすることを心配したのではない、ということ。そういう苦難は、神の定めともいふべきほどに、必ず起るであろう、とパウロは知っていました。テサロニケの兄弟たちにも、入信のときから繰り返し予告してきました。それは主イエスご自身がたどられた道ですし、おのおの十字架を背負つて主イエスの後に従うべきキリスト者たる者、必ず通らねばならない道です。

問題は、そのことを十分わきまえていなかった人々が、迫害が起つた途端、「こんなはずではなかつた」と動揺して、途中で信仰を捨ててしま

うことでした。これが、パウロにとって、そういう風にだけはなつてほしくない、しかしそうなつてしまふのではなからうか、と心配でならない事態でした。自分がもう一度行つて、あの兄弟たちを励まし、信仰を強め、誰一人動揺しないように助けなければならぬのではないか。そして最終的にはその仕事を、テモテに託したので。

兄弟たちが信仰を捨てるのが、どうしてそんなに問題なのでしょう。パウロの心配は、消極的に言えば、「誘惑する者があなたがたを惑わし、わたしたちの労苦が無駄になつてしまふのではなからうか」、悪魔が迫害の危機を利用して兄弟たちの信仰から離れさせ、自分たちの福音伝道が無意味になつてしまふのでは、という心配です。しかし、自分がせっかく頑張つて伝えたのに無駄になるのは悔しいと、ただそれだけの理由ではありません。積極的に言えば、「わたしたちの主イエスが来られるとき、その御前でいたいあなたがた以外のだれが、わたしたちの希望、喜び、そして誇るべき冠でしょうか。実に、あなたがたこそ、わたしたちの誉れであり、喜びなのです。」

パウロは、やがて主イエス・キリストが再び来られるとき、いわゆる終末、再臨のときに、テサロニケの兄弟たちが信仰をまつとうした者として主イエスに相見えることを望んでいるのです。「主よご覧ください、この兄弟たちを。彼らこそ、わたしたちの希望です。喜びです。誇るべき冠です。」パウロはそう言つて主イエスにご紹介したいのです。自身のことよりも兄弟たちのことで喜び、自分のような罪びとをも、この兄弟たちを救うために役立ててくださった主イエスに、深甚の感謝をささげたいのです。

わたしたちの今、ここでの信仰生活。この地上で今日、明日、主イエスに対して忠実であるかどうか。信仰にしっかりと立っているか。そのことが、終末の、再臨の主イエスの御前での大いなる喜びと直結する、大きな意味を持っているのです。パウロはそういう視点でテサロニケの兄弟たちのことを心配し、熱くなつていたのでした。そういう熱を、わたしたちも分け持ちたいと思います。

# 感謝の喜び捧ぐ

水沼 和子

クリスマスには父を思う。父と呼べる方の愛を思う。父と子が紡いだ壮大な愛のご計画。旧約の遠い昔から揺らぐことのなかった慈しみを。神が支配する恵みの年を告げるため、わたしたちの想像をはるかに超えたやり方で御子をわたしたちにお与えくださった。御子をお遣わしになるほどにわたしたちを愛してくださった。その父の愛にどう応えられよう。わたしたちにできることといえば、ただこの奇しき恵みに心から感謝して素直に喜び祝うことだけだろう。

わたしはクリスマスに受洗して五回目の記念日を迎えたが、それ以前のクリスマスとはいったいどのようなものだったか。

わたしの肉の父は亡くなって二十年になる。アメリカに本拠を置くライオンズクラブという社会奉仕団体に所属しチェアマンも務めていた。毎年クリスマスにはクラブ員の家族を招いて祝会があった。開会にあたりクラブ員たちは杯を高くかかげ「We Solve It」と声高らかに叫んでいた。それが彼らの合い言葉だったから。我々はサーブする、社会に仕え奉仕すると。社会的に弱い立場にある人々を支援する活動をしていただけけれど、その頃に父がキリストを知っていたらと思ってしまう。そしてわたしにそれを伝えてくれていたならと思ってしまう。クリスマスチャンになる以前のクリスマスとはそういうものだったけれど、父が亡くなってしまおうとそれもなくなり肉の父の慈しみはそこで絶えてしまった。

天の父を知るまでの長い間、わたしは愛を希求し寂しいときを過ごしてきた。

クリスマスチャンになって初めてクリスマスのほんとうの意味を知るところとなりクリスマスは大きな喜びに変わった。

だから祝会は主に喜んでもらえるような

ものにしよう。真摯に父の愛を享受し喜びに喜びをもって父にお返ししよう。昔ダビデがエルサレムに神の箱を迎えた時のように。主の御名によってわたしたちは集い、主の降誕を祝うため主をもてなすために持ち寄られた一つ一つの料理を並べ兄弟姉妹とともに祝いの席についた。

宍戸信次郎兄の感謝の祈りが祝会の始まりを告げ、わたしたちは互いに持ち寄った祝いの料理を楽しみ、そして満足した。

父がわたしたちに何をなさってくださいたのかわたしたちは知っている。その御子イエスがわたしたちに何をなしてくださいたのかわたしたちは知っている。

だから今年も昨年に引き続き、主が教えてくれた愛と示された恵みとを心に留めてクリスマスにちなんだ愛の物語「アルタバン物語」を主に捧げる。苦しむ人貧しい人を助けたアルタバンの愛の行いはやがてマタイによる福音書二十五章四十節の御言葉へと導かれる。

この物語の登場人物の声を演じたのは松谷先生はじめ今年受洗された若き姉妹、



アルタバン物語の声優のみなさん

眞野裕子、渡邊文香姉妹、昨年受洗された酒井ユリ姉、四年前に信仰告白された宍戸健太兄。一人で三人の博士や主の役などをこなした松谷先生の知られざる才能を垣間みることができた楽しいひとときとなった。その熱気も醒めやらぬ間に、宴は柴田真由子&宍戸健太兄妹のデュオによる主に捧げる調べへと。キリストの聖体の賛美と感謝を謳ったモーツァルト最後の年の作品。アヴェ・ヴェルム・コルプスの歌声ではないフルートとピアノによるシンプルな音色に新鮮な感動を覚えた。

ハレルヤの讃美と菊池才知子姉の感謝の祈りをもって祝宴は幕を閉じた。

主はこの祝宴を喜んでくれたでしょうか。最後に今年わたしたちのこの群れに三人の若き姉妹を加えてくださった恵みに心からの感謝を捧げたい。永遠に変わることはない父の慈しみに。ハレルヤ！

## 報告

\* 南部坂幼稚園では、十二月十四日(木)のクリスマス礼拝で二学期が終了し、冬休みに入りました。

\* 十二月二十四日(日)の礼拝後、例年通り、持寄り形式によるクリスマス祝会を行いました。今年も楽しい時間を共にし、主のご降誕をお祝いしました。

\* 十二月二十四日(日)午後七時より、聖夜礼拝をささげました。六十名余りの方が参加されました。

\* 未陪餐会員の木村敦弘兄が、仙台東一番町教会の二十四日(日)礼拝において信仰告白をされ、同教会に転出されました。

《各部報告 十二月度》

## 成人会

日時 十二月十七日

十三時〜十四時二十分まで  
場所 教会堂会議室

出席者 十名

開会祈祷 木村信太郎兄

一、聖書輪読

エレミヤ書 四十章から四十五章まで  
二節ずつ輪読した。

二、内容

聖書箇所概況

バビロンとの戦いに負けたユダの人々は、バビロンに連行されたものと、残ったものとに分かれた。エレミヤは、ユダに残った。

残留組の者はカルデヤ人の報復を恐れ、エジプトに逃れようとしたが、エレミヤに、神の宣託をたずねた。神の宣託は、「この地に留まれ」だった。

エレミヤは、神の言葉を伝えたが、民衆は、剣、飢饉、疫病の恐れにもかかわらず、エジプトに向かった。その中には、エレミヤもいた。

討論

敗戦組の身の振り方の混乱が見られる。日本では戦争に負けても外国へ逃れるという考えが浮かばない。従来の組織が壊れ、目標が失われて混乱した。

その立場によって意見がわかれ、選択に迷うこともあるが、自分だけの意見を主張するのも危険である。

三、次回

一月二十一日

聖書箇所 エレミヤ書四十六章〜四十九章

司会担当 松谷牧師

二月十八日

聖書箇所 エレミヤ書五十章〜五十二章

司会担当 柴田真由子

黙祷をもって閉会した。

## 婦人会

日時 十二月二十四日  
クリスマス祝会に合流